

國際協力



地域住民によるアフリカの里山の再生と保護事業

マリ・クリコロ州



事業概要

アフリカの「里山」において、地域住民自らが育て、自身で利用できる小さな林づくりを行い、最終的には里山を再生し生活の安定化を図る。主な活動は以下のとおり。①住民による里山再生（苗木配布、植林ワークショップ、配付苗のフォローアップ）、②里山再生モデルの実践（植林技術を研修した村人が実践者として、個々の里山で育苗・植林を行う）、③試験地・見本林での植生回復技術及び栽培技術の開発（荒廃地の植生回復、有用在来種の育成・生育促進、果樹の栽培技術など）。

事業成果

首都近郊の3地域で、延べ55ヵ所の村や学校などに苗木配布と植栽を行い、小さな林づくりを進めた。昨年度までに、育成してきた実践者は、それぞれ育苗・植樹を進め、地域の里山再生を引っ張る存在となりつつある。また実践者間の交流も進め、人的なネットワークの構築も進んだ。所

有者の変更により使用できなくなった試験地に代わり、新試験地を設置し、新たな植生回復試験を始めた。

事業をよく知る関係者の声

- ・ JICAの援助で学校運営委員会の組織が運営できるようになったが、こうしてその組織を通じて、同じ日本のNGOによって学校林の支援が受けられるのが大変喜ばしい。（小学校校長）
- ・ 自然林が伐採によって減少していく中、住民自らが苗木を植えて育てることは重要である。（元農業局技術者）

参加者の声

- ・ 村では、植えた木の保護柵に使う枝の確保もままならないほど植生が衰退しているので、学校林の保護柵の支援もお願いしたい。（男性）
- ・ 以前は全て市場から購入していたが、育てたバオバブから葉が取れるようになり、ソースの材料の出費が抑えられるようになった。（女性）



苗木配布



苗畑



小学校の学校林



ユーカリ、バオバブほかを植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付本数：1万4310本

参加者数

日本：2人

マリ：4740人

計：4742人

樹種

ユーカリ、バオバブ、カシュー
ナットほか

日本ーラオス友好の森展示林造成事業

ラオス・ビエンチャン県バンビエン市



事業概要

このプロジェクトは、地元樹種による植樹を行いつつ自然林を復元すること。共同で植樹祭を行い植樹を通じた国際交流と森林保全の普及啓発を行うこと、及び植栽後20年経過した森林を対象に間伐を導入実施し、その展示林を造成して熱帯地域での森林管理手法を検証することを目的としている。

事業成果

今年度は、8種類3290本の郷土樹種を群状植樹して3haの展示林造成を行った。植樹祭は7月22日、日本とラオス側から合計125人が参加して、1100本の植樹を行うとともに、中高校生を対象に森林講座を行うなど交流を深めた。1月の間伐ツアーでは、間伐の意義、間伐計画、選木の方法、安全伐木技術などについて、討議と現地での実技講習を行

った。

事業をよく知る関係者の声

- ・日本のボランティアによる森づくり支援は、地域住民に育林意欲を喚起するために貴重である。(森林局副局长)
- ・間伐の手法はラオス大学演習林でも導入したい。間伐の現地実習は参加希望が多く拡充してほしい。(ラオス大学林学副部長)

参加者の声

- ・子どもたちに森林保全の大切さを教えるいい機会になった。(ファイパモン村長)
- ・郷土樹種をたくさん植えたので、将来どんな森になるのか楽しみ。(高校生)
- ・初めて間伐を体験して有意義だった。(ラオス大学生)



郷土樹種8種を植樹



植樹には125人が参加



間伐実習



森林講座

実績とりまとめ

作業内容
 植付面積：3.0ha
 植付本数：3290本
 下刈面積：8.0ha
 間伐面積：2.0ha
 参加者数
 日本：160人
 ラオス：975人
 計：1135人
 樹種
 タブノキ、アフゼリア、ビルマカリン、メラワン、アピトン、シャムジンコウ、チーク

フィジー 森林と海の生物多様性保全に向けた植林と環境教育推進プロジェクト

フィジー・ビチレブ島ナンドロガ・ナボサ県ほか



事業概要

リゾート開発などにより森林やマングローブの伐採が進み、生物多様性が劣化するとともに、海面上昇や大型サイクロンなどの異常気象による被害が深刻化しているフィジー・ビチレブ島において、持続的な緑化・環境保全活動を促進するため、植林活動及び実践的な環境教育を実施。主な活動は以下のとおり。15の学校及び周辺地域における植林・環境教育活動、育苗活動、エコキャンプの開催、マングローブ植林。

事業成果

2年目である今年度は、モデル学校・地域を変えて活動を実施。前年度植林した場所の管理を行いながら、土砂崩れなどのリスクのある山岳地帯を中心に、10の学校・地域において植林を行った。政府関係者からの紹介や学校同士のネットワークによって事業について周知が広がっており、参加者の意欲も高まっている。マングローブについても、2

カ所で試験的に植林を開始した。

事業をよく知る関係者の声

- ・子どもたちにマングローブや森林保全の大切さを伝え、緑化を促進する素晴らしい機会になっている。教員にとっても学ぶことが多く、学校独自で環境教育を進めることができるよう、知識や技術を引き続き学んでいきたい。(小学校教員)
- ・この事業は、マングローブと森林保全を進める政府方針とも合致している。(林業省担当者)

参加者の声

- ・生物多様性を保全することは、観光客を魅了するフィジーの観光資源を守ることににつながる。我々の業界にとっても非常に価値のある活動だ。(ホテルスタッフ)
- ・家族や村の人たちと一緒活動することができてうれしかった。一本の木を育てることの大変さや大切さが分かった。(生徒)



マングローブの育苗



マングローブの植樹には200人が参加



フィジーマツほかを植樹



マングローブの根に絡まったゴミを回収

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：2.66ha
植付本数：4250本
環境教育：12回
清掃活動：6回

参加者数

日本：53人
フィジー：1003人
計：1056人

樹種

マホガニー、フィジーマツ、テリハボク、マングローブほか

2019年度 緑の国際ボランティア研修(タイ国)

タイ・チャイナート県、ナコーンラーチャシーマー県



事業概要

研修員が国際緑化活動の重要性や緑の募金が果たす役割について理解を深めることをめざし、6日間の緑の国際ボランティア研修を実施。研修員はバンコク、パトンタニ県、チャイナート県、ナコーンラーチャシーマー県においてタイ国中部・東北部の開発に伴う森林伐採地を訪問し、NGOが取り組む植林活動地の視察、植林体験、地域住民との意見交換などを行った。

事業成果

これまで10回の緑の国際ボランティア研修を東南アジア諸国にて開催し、有益かつ有意義な研修を続けてきた。

今回も植林活動地を訪問し、各県の現地住民とも交流し、協働して植林活動に従事したことで、現地の人々との相互理解を深めることができた。

参加者の声

- ・東南アジアにおける森林とその保全に関する知見を深めることができただけでなく、日本とタイにおける生活や文化の違いに関しても学ぶことができた。
- ・現地の方々と共に植林を行うことで活動における協働の大切さを実感した。
- ・環境問題への意識が高まった。所属している環境活動サークルなどでもこの経験を活かしていきたい。



チャイナート県での植樹



ナコーンラーチャシーマー県での植樹



研修成果発表会の準備



研修成果発表会 (ラジャマンガラ工科大学)

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：4.8ha
植付本数：6720本
下刈面積：2.0ha

参加者数

日本：22人
タイ：84人
計：106人

樹種

在来樹種

タイ国チャイナート県における森林再生を目指した植林事業(フェーズ3)

タイ・チャイナート県



事業概要

本事業は、タイ・チャイナート県において、薪炭材の確保や非木材林産物の収穫を通じた地域住民の生活安定と自然環境および生物多様性の保全を両立できる森林再生・保全システムを根付かせていくことをめざしている。以下の活動を実施した。①地域住民、民間企業と協働での在来樹種の植林、②持続可能な森林管理に向けたステークホルダー間におけるワークショップの開催、③森林管理住民グループの形成に関する支援、④地域住民の持続可能な森林管理に関する知識・技術向上を図る研修。

事業成果

地域住民と協働して協力を得て本事業(3年目)では植林のほか、ワークショップの開催、森林管理住民グループの形成の支援、森林管理に関する知識・技術向上を図る研修

等を実施した。しっかりと組織化された森林管理住民グループを中心に、植林地は適切に管理されている。今後も森林管理住民グループによる地道な植林活動が継続されることを確認した。

事業をよく知る関係者の声

- ・定期的に植林地を管理しており、1・2年目の事業で植林した樹木もしっかり生育している。また、地域で問題となっている廃棄物の不法投棄等への監視を強化している。植林地管理費用の調達に苦しんでいるが、今後も寄付等呼びかけていく。(森林管理住民グループ)

参加者の声

- ・地域で事業への認知が広がっており、植林活動に関する地域住民の関心を高める良い機会となっている。今後も活動を継続してほしい。(住民)



植樹についてのワークショップ



タマリンド、パラミツほか3200本を植樹



住民と協働で植樹



植樹参加者

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：2.3ha
 植付本数：3200本
 下刈面積：0.9ha
 研修：3回
 ワークショップ：1回

参加者数

日本：10人
 タイ：52人
 計：62人

樹種

タマリンド、パラミツ、パドウクほか

タイ国ナコーンラーチャシーマー県における森林再生を目指した植林事業(フェーズ3)

タイ・ナコーンラーチャシーマー県



事業概要

ナコーンラーチャシーマー県において、薪炭材の確保や非木材林産物の収穫を通じた地域住民の生活安定と自然環境および生物多様性の保全を両立できる森林再生・保全システムを根付かせていくことをめざして、以下の活動を実施した。①地域住民、民間企業と協働での在来樹種の植林、②持続可能な森林管理に向けたステークホルダー間におけるワークショップの開催、③森林管理住民グループの形成に関する支援、④地域住民の持続可能な森林管理に関する知識・技術向上を図る研修。

事業成果

地域住民と協働して協力を得て植林(補植を含む)を実施するとともに、ワークショップの開催、森林管理住民グループの形成に関する支援、研修等を実施した。事業終了後

も森林管理住民グループを中心に、地域住民による自主的な植林活動が継続されることを確認した。

事業をよく知る関係者の声

- ・本事業の支援を受ける前は、メンバーで細々と植林および森林保全に取り組んできたが、本事業の実施により、森林管理住民グループの活動が活性化され、地域行政との連携も強化された。(森林管理住民グループ)
- ・経済的な理由で活動規模は縮小すると思うが、本事業終了後も地域に森林保全活動を広めていく。(森林管理住民グループ)

参加者の声

- ・事業1・2年目で植林した苗木が立派に成長している。植林地を地域で大切に管理していきたい。(郡事務所職員)



植樹前の説明



メンガ、ケランジイなどを植樹



地域住民と協働で植樹



知識・技術向上を図る研修

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：2.4ha
 植付本数：3,300本
 下刈面積：0.5ha
 研修：3回
 ワークショップ：1回

参加者数

日本：19人
 タイ：47人
 計：66人

樹種

メンガ、ケランジイ

カンボジア国コンポンチャム州における持続可能な森林管理を目指した植林事業(フェーズ1)

カンボジア・コンポンチャム州



事業概要

コンポンチャム州は森林密度が非常に低い上に、洪水や干ばつなどの気候変動による影響に対して非常に脆弱な地域である。貧困な地域住民にとってはこれらの災害の緩和は喫緊の課題である。森林の増加によりこれらの災害による影響の緩和が期待され、住民の生計向上が期待される。そこで、本事業では、急速な森林減少と劣化に伴い生物多様性の減少が進む同地域において、地域住民の生活に深く根付いている寺院および小学校を軸に、持続可能な森林管理をめざした植林を実施した。また、植林や森林保全の重要性に関する理解向上のためのワークショップを実施した。

動やワークショップを通して、森林保全の重要性を理解することができた。次世代のためにも在来種の木々を残し、これから想定される様々な気候変動への対策としたいと考えてくれた。また、若い世代の積極的な関わりは、次世代に森林を残していくことにつながっていくと実感できた。

事業をよく知る関係者の声

- ・住民は森林が減少している状況を危惧しているため、支援を受け、植林ができたことにとっても感謝していた。今後も植林を続けたい。(60代コミュニティーリーダー)
- ・植林活動を通して、森林の重要性や自生樹種について理解できた。(60代僧侶)

事業成果

多くの地域住民や学生が参加し、植林を実施することができた。コンポンチャム州にはコミュニティフォレストがなく、森林エリアの減少は著しい。現地住民たちは植林活

参加者の声

- ・植林活動に初めて参加した。とても楽しかったし、また参加したい。(学生)



苗木の準備



メンガ、ケランジィ、コキなどを植樹



子どもたちも参加



僧侶、地域住民、学生などが参加

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：6.5ha
 植付本数：9100本
 下刈面積：5.5 ha
 ワークショップ：4回
 森林管理に関する研修：4回

参加者数

カンボジア：207人
 計：207人

樹種

メンガ、ケランジィ、コキ

インドネシア 森林と水保全のための「まちの森」づくりと環境教育推進プロジェクト

インドネシア・東ジャワ州マドゥラ島スメネプ県、パメカサン県



事業概要

乾季には深刻な水不足、雨季には大洪水の被害が多発しているインドネシア東ジャワ州のマドゥラ島において、水保全に向けた植林活動と持続的な環境保全活動を促進するため、環境教育・啓発活動を実施。主な活動は以下である。「まちの森」における植林活動、15の学校における植林活動・環境教育活動・水保全学習の実施、マングローブの植林活動、雨水貯水設備設置（1校）、環境教育テキストの作成（エコキャンプの代替活動）。

事業成果

事業最終年である今年度は、最多となる21の学校がプロジェクトに参加し、そのうち1校に雨水貯水設備を設置した。また緑化に加え、有機農業の実習、環境セミナー、リサイクル活動、清掃活動、ネーチャーゲームなど、環境保全についての意識や手法を伝える多様な活動を行った。「まちの森」の活動には、さまざまなセクターの人々が参加し、

共に地域の森づくりに取り組んだ。自分の土地に自主的に植林を始める住民も増えている。

事業をよく知る関係者の声

- ・このプロジェクトは、2009年に政府が制定した「環境の保護及び管理に関する法律」に即したものであり、我々の事務所も大いに賛同している。子どもたちや教師の環境に対する意識は良い方向に変化しており、参加校の間には相乗効果が生まれている。（県環境事務所）
- ・子どもたちは、故郷の環境をより緑豊かで、美しく、さまざまな生命が共生する場所になるよう、熱心に活動に取り組んでいる。活動を通じて環境分野に関する人材育成も大いに進んでいる。（小学校校長）

参加者の声

- ・植林の大切さや手法を学び、自分の家でもマホガニーやチークの苗木を植えた。植林の大切さや楽しさを学べたことに感謝している。（地区住民）



マングローブの植樹



中学校での植樹



「まちの森」、約400人が500本を植樹



在宅での環境学習のための教材（エコキャンプの代替）

実績とりまとめ表

作業内容

植付面積：2.91ha
 植付本数：5741本
 樹勢回復：600本
 下刈面積：0.25ha

参加者数

インドネシア：2418人
 計：2418人

樹種

アカシア、マホガニー、チーク、モクマオウ、マングローブほか

地球温暖化防止と日中友好の森づくり事業

中国・内モンゴルエジンホロ旗



事業概要

苗木の維持管理を目的として、現地林業局の協力のもと日常的な巡回を実施した。天候に応じて適宜水遣りを実施し、また病害虫対策として消毒薬の散布、森林火災防止策として下草刈りなどを実施した。10月末には協力企業の関係者と共に、植林場所の視察及び管理状況の確認と地元小学校を訪問した。

事業成果

10月に協力企業社員と現地を視察。今年度は生育状況を確認だけでなく実際の管理作業を体験する機会もあった。苗木の生育には日常的な維持管理が大切だと改めて実感す

ることができた。

事業をよく知る関係者の声

- ・生育状況の確認と同時に、地元小学校での交流事業をしてもらい、子どもたちも大変喜んでいました。外国の方との交流はほとんどないので、とても良い機会となった。(林業局・林場長)

参加者の声

- ・これまでの植林の成果や生育状況をどう日本側に伝えていけるか、新しい課題として取り組んでいきたい。(協力企業社員)



草刈り



植林地の視察



植林地の視察



小学校での交流

実績とりまとめ

作業内容

これまでに植林した苗木に水やり・下刈り・巡回など
地元小学校との交流

参加者数

日本：2人
中国：60人
計：62人

モンゴル国ボルガン県における飼料木を用いた放牧地保全林造成事業

モンゴル・ボルガン県ダシンチレン郡



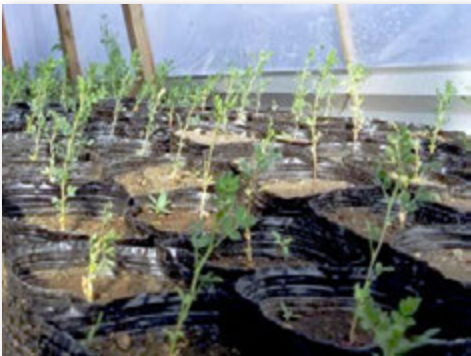
事業概要

飼料木を用いて放牧地保全林を育成し、過放牧等による放牧地砂漠化進行と家畜飼料不足を緩和し、ひいては放牧民の生活向上に寄与する。主な活動は以下のとおり。①劣化した放牧地に飼料木林育成地を区画しフェンスで囲む、②植林樹種であるカラガナ木の種子とポット苗を調達、③直播発芽率及び植栽苗活着率を高めるための地拵え、④地元学校の生徒を中心によるボランティア植樹祭（今年度は新型コロナウイルスの影響で中止）、⑤地元住民による種まきと苗木の植付け（コロナの影響で少人数で3回に分け実施）、⑥植林地の維持管理。

事業成果

10haのカラガナ木植林を行った。昨年の植林事業の技術的な課題であった苗木品質の不良や植林作業参加者の作業不慣れは改善され、活着率は昨年より向上した。

ただ、コロナの影響で移動や集団行動などが制限されていたため、当初予定していた植樹祭などは実施できなかった。また、ボランティア植樹計画も少人数で3回に分けて実施した。



カラガナ苗



植樹した幼苗



植樹



フェンス設置

実績とりまとめ

作業内容

フェンス設置：1000m
 地拵え：10ha
 植付本数：1万本
 植付面積：10ha
 直播（穴）：4万穴
 直播（面積）：10ha

参加者数

モンゴル：51人
 計：51人

樹種

カラガナ

地球温暖化防止のための寒帯林保全及び環境教育事業

ロシア・ハバロフスク地方イリインカ地区



事業概要

目的は地球温暖化防止およびアムール河溶存鉄保全とし、主な活動は現地ロシアにおける有用種を用いた植林活動と環境教育活動である。これまでは、ロシアで伐採禁止種のチョウセンゴヨウを主としてしてきた。今回より絶滅危惧種を追加する予定で、ハバロフスク地方の現地メンバーが一部を実施。新型コロナウイルス感染症の影響でロシアへの入国が禁止されたため、日本からの植林ボランティアツアーは実施できなかった。

事業成果

日本人が不参加になってしまったので、ロシア人のみで記念植樹となってしまったが、次回に残りを行うこととした。

事業をよく知る関係者の声

- ・日本のボランティアがロシアを訪問できなくなり、イベ



植樹の準備



シラカバ、エゾマツほかを植樹



1本ずついいねいに植樹



植樹後のイリインカ地区

ントを中止せざるを得なくなったが、日本側による資金支援のおかげでロシア側の参加者の努力で植樹ができた。イリインカ地区を始め、地球全体の環境の健全化に貢献したと考えている。今後はこれを機会に、児童交流などの分野における協力の計画を確実に実施できることを期待する。(ロシア指導者)

参加者の声

- ・一度木を植えると、生き物への配慮が高まり、自然保護の必要性を理解するようになる。どうやって自分の生活をもっと幸せにすることができるかと考えるようになる。今回の記念植樹によって周りの景色がきれいになったし、新鮮な空気になっていくように思う。私たちの村で緑地整備に協力してくれた方々に感謝します。(20代男性)

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0.09ha

植付本数：235本

参加者数

ロシア：30人

計：30人

樹種

シラカバ、エゾマツ、マンシュウクルミ、フウセントウワタほか

インドネシア・バリ島での植樹・環境教育事業

インドネシア・バリ島シンガラジャ市



事業概要

目的は、インドネシア・バリ島の高校生・大学生と日本の大学生の環境意識向上をめざすことにある。その手法として、平成27年から、岩手大学とインドネシア・バリ島・シンガラジャ市にある国立ガネーシャ教育大学が続けてきた環境分野の国際交流活動の一環で、同大学とバリマンダラ高校において、森林の大切さに関する環境セミナーを開催した。また、シンガラジャ市内のスカルノ公園で、現地の美化局と協働して植樹イベントを行った。

事業成果

カウンターパートとして、国立ガネーシャ教育大学日本語教育分野の教員・学生と活動を共にしている。バリマンダラ高校に向けたセミナー、およびガネーシャ教育大学で行われるセミナーに関しては、岩手大学学生が日本語で説明し、ガネーシャ教育大学学生がインドネシア語で通訳した。セミナーを行うことにより、主催者側の大学生が参加した生徒・学生に対し、より深い説明が可能となり、参加者の理解を深めることとなった。

スカルノ公園にて40本の植樹を行った。参加者のほとんどが植樹活動が初めてで、活動後の感想からも、貴重な体験ができたと思ったようだ。

セミナーから始め、樹木の大切さを勉強してからの植樹活動は、自分たちが環境を良くする一員としての役割を担っていることを認識できる活動であった。

事業をよく知る関係者の声

- ・植樹活動を通して、学生は初めて、植樹の大変さを知って、その経験から木を大切にする気持ちも育った。このように異文化を超えて、環境活動ができたことに環境保護意識も強くなってきた。この活動はこれからも継続できることを願いながら、もっと幅広く活動できることを期待している。植樹活動のように実践的な環境教育に繋がる他の活動も行った方が学生にとって効果的であることが分かった。今後も、学生たちは実際に体験できる環境教育を行いたい。(国立ガネーシャ教育大学助教)

参加者の声

- ・次の世代のためにも森を守りたいと思った。(高校生)



大学での環境セミナー



高校での環境セミナー



植樹



セミナーで学んだ後に植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付本数：40本

参加者数

日本：70人
インドネシア：270人
計：340人

樹種

Pohon cendana、Pohon gahal、majugau、kaliasem

中国・内モンゴル自治区アラシャン盟ウランブハ沙漠における沙漠緑化

中国・内モンゴル自治区ウランブハ沙漠



事業概要

進行する沙漠化を止め、酸性黄砂の発生源をなくし、農牧民の生活の安定と向上をはかり、水源、防砂林、草地を増やすために、防護柵を設置し家畜放牧を防ぎつつ植樹した。植樹には日本からのボランティアだけでなく、地元の農牧民が作業にあたり労働収入につながり、緑化への理解が深まった。

事業成果

沙漠化が進むウランブハ沙漠に5000本の緑が増えた。昨年この助成でサポートしていただき防護柵を設置することができ、家畜の放牧や野生動物の侵入による木々の生育の影響が激減した。本年は防護柵の修繕と延長をしたこともあり、活着率に大きな成果が期待できる。

事業をよく知る関係者の声

- ・流動砂丘での植林は高木のポプラを中心に周囲を灌木の



ポプラ、タマリスクほかを植樹



5000本を植樹



動物侵入を防ぐ柵



地元の学生や企業からも参加

タマリスク、スナナツメで植林を進めている。活着率が高い春を中心に植林し確実に緑化面積が広がっている。ウランブハ沙漠は年間雨量100mm以下の乾燥地帯での植林作業は灌水作業が重要である。

また、地域の学生、地元企業等の協働植林により沙漠化防止の必要性と沙漠産業の育成を体験してもらう事で植林の必要性を地元住民に理解してもらうことができた。(特非) 日本砂漠緑化実践協会相談役

参加者の声

- ・多くの木を植え無我夢中で穴掘りをした。中国の子どもたちとの交流会がもう少し長い時間をとってもらえると嬉しい。(女性)
- ・中国の沙漠に行くことで、日本と中国の“環境”と“経済”を同時に考えることができるので、国際貢献だけではなく勉強になった。(大学2年男子)

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：10ha
植付本数：5000本

参加者数

日本：30人
中国：53人
計：83人

樹種

ポプラ、タマリスクほか

天水市豹子溝植物園専門園區造成事業

中国・甘肅省蘭州市、天水市



事業概要

多くの市民の目に触れやすい植物園内に日本をイメージするサクラの専門園區を造成し、その看板に緑の募金公募事業による取り組みであることを紹介するとともに、共同作業等を通じて更なる日中交流の促進を図る。

天水市の中心部から1kmほどの所に、天水市秦州区林業・草原局が建設した豹子溝植物園がある。その園内には「森林体験教育センター」が併設され、誰もがいつでも生態環境保護や森林生態などを体験学習できる施設で、多くの来館者でにぎわっている。本事業では植物園の一角に日本をイメ

ージするサクラの専門園區を造成した。

事業成果

多くの市民や子ども達が訪れる植物園の一角に日本をイメージするサクラの植栽したことで、日中の友好促進に役立つものと考えられる。

事業をよく知る関係者の声

- ・さらに事業を継続してほしい。(甘肅省林業・草原局及び天水市及び天水市秦州区林業・草原局の関係者)



苗木の運び入れ



サクラの植樹



根元をビニール被覆



除草

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0.2ha
植付本数：180本
下刈面積：0.2ha

樹種

サクラ

屋敷林造成事業—住民主体のコミュニティー完結型緑化事業

エチオピア・ノースウォロ州ラリベラ市



事業概要

活動地域では炊事などの燃料として主に炭や薪が使われているが、その多くは村の共有地に残る数少ない木を伐採したものである。農村住民も年々目減りする緑に危機感を持ち、植林の必要性も感じてはいるが、苗木確保の難しさから実行には至らない。本事業では10家族を選定し、住民自ら自宅の庭先や共有地で苗木を生産し、自分の家や畑の周りに植樹した。また果樹や野菜を植えるなどアグロフォレストリーの手法も取り入れ、住民の経済的自立を支援し、持続的に活動できるプログラムを複数の地区で実施した。

事業成果

地区から10家庭を選定、農業局などの指導者により各家庭の庭に苗畑を作る指導をする。45の畝に7種類の種を蒔き、コルディアアフリカナ、シャイニスモルなど2万9500本の苗木を生産した(1565～4108本)。参加者らは生産した

苗の40%を自宅周辺に植え、13%は近所に無料配布、26%は販売し収入を得た(夜間警備員の1カ月の給与程度)。苗木生産の技術移転とともに、そのメリットを大いに感じてもらえたはずだ。

事業をよく知る関係者の声

- ・現在ラリベラ市で植林を続けている団体は当団体しかなく市の期待は大きい。今年度は12種6万2000本の苗木をラリベラ市に提供した。ラリベラ市長からは市のグリーンマスタープランづくりやニュータウンの緑化なども進めてほしい旨、直接フー太郎の森基金に依頼されている。

参加者の声

- ・初めて種から木の苗を育てた。子どもはどんどん育っていく様子が楽しいようで、水やりなど手伝ってくれた。
- ・種や藁、農機具、水道代、日当まで支給され、しかも家の周辺に緑ができ、参加して良かった。



屋敷林苗畑



苗木の搬出



苗木運搬



住民への苗木の無料配布

実績とりまとめ

作業内容

育苗：14万1500本
植付面積：6ha
植付本数：8万本

参加者数

エチオピア：245人
計：245人

樹種

アカシアなど17種

環境保全の熱帯雨林再生事業

フィリピン・ミンダナオ島ダバオ市



事業概要

かつて商業伐採により失われた熱帯林を再生させ、昨今、大きな問題にもなっている異常気象についても世界全体の視点でとらえ、植林活動を展開することを大きな目的とした。主な活動として、月に1回～2回の定期的な植林活動の実施とともに、教育的な観点も取り入れ、専門家の指導の下、エコロジーセミナーの定期実施、また植林活動の現場だけでなく、植林地域全体を見て現状を知るためのトラッキングも行った。これは、学生や若年層に対する啓発活動も教育的な観点を加えることで、より環境保全への参画意義を高める機会になったと考察する。

事業成果

地域住民のみならず、周辺の学校の生徒にも参加を呼びかけ植林活動を行ったことは、熱帯雨林再生・環境保全の重要性を将来にわたり、フィリピンの環境保全を支える世代に波及させたことであり、大きな意義があったと考える。

また、日本から大学生が現地を訪問して植林したことは国境を越えたネットワークが期待できる。

事業をよく知る関係者の声

- ・異常気象の影響で日本国内も大きな災害が起きているが、これは世界全体の問題であり、熱帯林再生の活動の重要性を再認識することとなっている。かつて日本などの商業伐採により失われてしまった木々を再生させることは我々の大きな使命である。(現地スタッフ)

参加者の声

- ・トラッキングをして客観的にどのように森林が再生していくか見ると自分たちの貢献が見えて植林活動の意義が理解できた。(20代日本の大学生)
- ・未来に残していく森林を子どもたちといっしょにつくっていくことは教育・環境面でも意味のあるものだと感じた。(20代日本の大学生)



地元の学生による植樹



現地在住の日本人と日本からの学生による植樹



子どもたちも参加



エコロジーセミナー

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：1.8ha
 植付本数：520本
 下刈面積：1.8ha
 エコロジーセミナー：9回

参加者数

日本など：5人
 フィリピン：115人
 計：120人

樹種

ナラほか

ブルキナファソ・バム県における村落植林プロジェクト

ブルキナファソ・中央北部州バム県



事業概要

植生の衰退によって住民の生活に必要な薪材の確保が困難になっている現況の改善を図り、かつ収入の手段として成長した植林木の用材販売が行えるよう、村々に隣接する未利用地に生活林を造成する。主な活動は以下のとおり。①7村において計15人の植栽希望者に対するユーカリ苗木8100本の配布と植栽。②指導普及員による巡回指導。③実施状況の追跡調査。

事業成果

薪材や用材としての利用は、初期の植栽苗木が十分に成長した平成27年より始められ、徐々に利用本数、販売利益が増えている。今年度は、5村の9人が計443本の用材販売

を行った。

事業をよく知る関係者の声

- ・農繁期にも関わらず、今年度は423人が植栽に、263人が灌水作業に自主的に参加した。これは地域の人々が、木を植えることによって生活がより良いものになると実感し始めているからである。(現地協力団体代表)

参加者の声

- ・湖の周囲は雨季になると氾濫するので畑がつかれない。でも木を植えることはできるので、6年前から参加した。今では木が大きくなって薪にも使え、妻も喜んでいる。(パディノゴ村住民)



植樹



灌水作業



樹木管理



成長する樹木

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：11.25ha

植付本数：8100本

参加者数

ブルキナファソ：423人

計：423人

樹種

ユーカリプトウス、カマルデュレンシス

インドネシア・東スンバ県における緑化推進のためのマングローブ植林および緑化教育事業

インドネシア・東スンバ県カル村



事業概要

植林の目的は荒廃した海岸の自然環境を回復するため。主な活動は次のとおり。①少なくなってしまったマングローブの植林、②植林イベントを開催し、住民とともに植林、③住民に環境保全の大切さを話し、住民とともに海岸清掃活動、④植林の大切さを学ぶことができるインドネシア語の絵本作成。

事業成果

1月に植林イベントを開催し1500本のマングローブを植林。その後新型コロナウイルスの感染拡大に伴いイベント開催が禁止されたため、現地NGOスタッフのみでソーシャ

ルディスタンスを保って600本植林。また、植林の大切さを学ぶ絵本を作製した。

事業をよく知る関係者の声

- ・日本からの支援で毎年植林活動を継続することができ、マングローブが徐々に増えてきている。植林したマングローブは根がしっかりと張り大きく育っている。(現地NGO)

参加者の声

- ・ラジオでマングローブ植林を聞き参加した。苗木を理想的な間隔を取って植えた。植林をしながら良い運動ができた。(男性)



マングローブの植樹



1本1本ていねいに植樹



1月の植林イベント参加者



残った苗を現地NGOスタッフで植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：2ha
植付本数：2100本

参加者数

インドネシア：40人
計：40人

樹種

マングローブ

フィリピン アブラ州生物多様性改善のためのモデル植林プロジェクト

フィリピン・アブラ州



事業概要

プロジェクトは、18.7ha（1年目：6.7ha）+（2年目：6ha）+（3年目：6ha）の総面積をカバーしている。2019年に、在来種の苗木2800本、果樹の苗木700本、マドレデカカオの挿し木5400本が地元の人々によって植えられた。コロナ禍のピーク時には、現地の維持管理のために地元の人々に動いてもらうことは困難だった。これにより、植えられた苗木の生存率はわずか55%になった。2020年6月から7月にかけて600本の在来種の苗木を植え替えた。環境保全セミナーは2回開催、125人の地元住民が参加した。

事業成果

植林活動に関連した活動への参加者数：505人、セミナー並びにワークショップ：生徒達、教員及びボランティアを含む125人、設置された防護柵：1.6kmほか。

事業をよく知る関係者の声

- ・植林前に苗木をポリマー溶液に浸す効果を検証した。結果、溶液に浸した方が活着率が高くなることがわかった。植林を実施する他団体にもその有効性について周知していきたい。

参加者の声

- ・当日はとても暑く、苗木を運ぶために川を歩いて渡るのはとても大変だった。作業では友達と一緒に穴を掘り苗木を植えた。自分が植えた苗木の成長がとても楽しみだ。(12歳)
- ・木々が失われたはげ山をはじめて見たときは、本当に衝撃を受けた。活動に参加した後は、植林の大切さを心から感じ、続けることが大切だと理解できた。苗木が育ち、コミュニティに希望をもたらすことを願っている。(40代)



苗木や資材を植樹場所まで運ぶ



ナラやモラベを補植



草刈り



乾季には苗木に水やり

実績とりまとめ表

作業内容

土地の整地作業：6ha
草刈り：18.7ha
植栽と施肥：8900本
植え替え：600本

参加者数

フィリピン：630人
計：630人

樹種

ナラ、モラベ、マンゴー、ランブータン、マドレデカカオ

マダガスカル、アンジアマングラーナ監視森林とその周辺地域での植林

マダガスカル・マジュンガ州アンジアマングラーナ村



事業概要

マダガスカル共和国マジュンガ州アンジアマングラーナ監視森林地域の保全とアンジアマングラーナ村の水涵養と地域産品の創出である。主な活動は、①適正樹種を選抜し種子を収集すること、②植林用苗床の整備と指導、③植林地の整備と植林活動の指導、④果樹など有用植物による地域産品の創出に協力することである。

事業成果

適正樹種としてラミー、バオバブなど固有種とマンゴー、カシューナッツ、アカシアなどの種子を収集して苗畑の整備を指導し、植林地 5 ha にラミーやアカシアなどを植林した。

ラフィアは、水系を中心に緑の回廊を形成するために苗木 300 本とともに収集した種子 200 個を直接、水源と川辺に植えた。ラフィア苗とタケ苗育成を始めた。

生徒らへの植林指導を継続し、村民共有地へのカシュー、

パパイヤ植林を周辺住民への植林活動啓蒙の一環として行った。

植林地防護のための柵建設用に、2010年植林のアカシアの枝を利用することができ、また生け垣用にブーゲンビリアの植樹を始めた。

事業をよく知る関係者の声

・植林活動が婦人や子どもたちにまで広がっていることに感動した。豪雨の中でたくさんの人びとが苗を選び、種子を集め、植林をしているのを見て、この事業が地域の人びとにかなりの雇用も生んでいると感じた。(旅行中の日本人)

参加者の声

・苗生産には、マダガスカル独自の技術がある。生け垣用には、ブーゲンビリアも効果的である。(50代男性)
 ・果樹生産ができれば村も潤う。パパイヤとカシューには期待している。(前村長)



植林地



植林地周囲の柵



苗畑



果樹園づくり

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：5ha
 植付本数：5100本
 下刈面積：5ha
 活着調査：5ha

参加者数

マダガスカル：325人
 国外：2人
 計：327人

樹種

ラミー、アカシア、パパイア、バオバブ、マンゴー、ラフィア、カシュー

パレスチナ自治区ナブルス県の耕作放棄地・渓谷への植樹を通じた地域の環境保全事業

パレスチナ自治区・ナブルス県北アシーラ町



事業概要

イスラエルによる土地接収の対象にある耕作放棄地、生活排水により汚染された渓谷沿いの農地への植樹を通じ、環境問題、政治上の不平等に対して、地域の土地のレジリエンスを高めること。主な活動は以下のとおり。①植樹場所の雑草・低木の除去・穴掘り、②コミュニティ内外からのボランティアの動員、③土壌浄化作用の期待できるアカシア、成長スピードが速く山間部などの過酷な土壌環境でも育つイナゴマメ、地域の農産物多様化の観点からリンゴの木を植樹、④冷害・害獣（イノシシ）除けの囲いと柵の設置、⑤降雨量の少ない山間部植樹地への灌漑網の設置、⑥木の植え付けと生育状況についてのモニタリング。

事業成果

今年度は村溪谷に日常的に放流されている生活排水の問題にも注目し、土壌浄化作用の期待できるアカシアを植樹木の1つに選択した。植樹は雨季の1か月間を通して行われ、地域の農家、町役場スタッフがリーダーシップをとっ

たことが昨年と大きく異なる点であった。ボランティアの安全面に配慮し、渓谷付近の農地への植樹は町役場が行ったが、耕作放棄地、また森林火災で被害に遭った山間部への植樹には、地域内外からボランティア64人が参加。

事業をよく知る関係者の声

- ・今年の8月、森林火災で村入口の道路沿いで樹齢20年以上の木が燃えてしまった。農業省から寄付された約300本の街路樹とあわせ、焼け野原となった道路沿いにも植樹。予想外の事態にもパルシック、行政、住民とが連携し対応できたのはよかった。(北アシーラ町長)

参加者の声

- ・次にパルシックが植樹をする機会があれば、ガン患者など社会に取り残された人々を対象にしたイベントを企画してほしい。(40代女性公務員)
- ・植樹初心者でも楽しめるように、イベントの一日前に植え方のアドバイスなどをもらえたらよかった。(20代男子大学生)



植樹用の穴の掘削



植樹方法を指導する農業専門家



ボランティアによる植樹



植樹参加者

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：2.3ha

植付本数：1300本

樹種

リンゴ、アカシアほか

第2期モウス沙地における砂漠緑化・生態混交林造成事業

中国・内モンゴル自治区オルドス市



事業概要

内モンゴル自治区オルドス高原に位置する毛烏素沙地周辺は、かつては豊かな植生の広大な草原地帯だった。しかし、過放牧等による人為的要因により植生は衰退した。現在では砂漠化が進行し、固定砂丘から流動砂丘へと土地の劣化が進んでいる。この状況を受け、当地においては自然条件、社会条件に則した生態系の回復と土壌管理が求められている。本事業では在来低木類を中心に植栽し、緑化と生態林を回復させることを主目的とし、将来的に植栽した苗木から挿し木や種子を得ることにより、事業の自立化を図る。

事業成果

前年度事業を継続するかたちで実施した。緑化事業の成果は植栽数・植栽面積の増加である。また、現地の方々の

植林関連技術の向上は目を見張るものがあった。これは現地スタッフが熱心に技術指導を継続してきた成果といえる。

事業をよく知る関係者の声

- ・コロナウイルス拡大により大変不安であったが、作業をすべて終えることができほっとしている。今年も、前年の作業に参加した人が多く、全体的に作業がスムーズに進んだ。多くの参加者が得られたことは、緑化に対する意識が確実に向上しているものと言える。(現地パートナー代表)

参加者の声

- ・ポプラなどの高木ばかり植える砂漠での緑化活動には抵抗があったが、生態系に配慮し、かつ私たちの生活に結び付いた植物を植える取り組みには、やりがいを感じている。(50代女性)



羊柴の苗木



旱柳の苗木



植樹



植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：6ha
植付本数：1万4400本
防護柵設置：800m

参加者数

日本：34人
中国：116人
計：150人

樹種

沙柳、旱柳、羊柴、臭柏

マレーシア・サラワク州における地域住民参加型マングローブ林再生事業

マレーシア・サラワク州クチン市



事業概要

マレーシア・サラワク州クチン湿地国立公園における近年の開発により森林が劣化した地域及び周辺地域において、地域住民参加型の育苗・植林・保育によるマングローブ林再生を行う。①マレーシアと日本の専門家が、育苗・植林・保育の状況について現場を確認し指導を行った。②これまで協働してきた2村に加えブンタル村が活動に参加した。③地域村落に簡易苗床を造成し苗木を育苗、地域住民が主体となり植林・保育を行った。④都内及びサラワク州森林局で活動報告会を実施し広報などを行った。

事業成果

地域住民参加による育苗・植林・保育を継続し、4000本の育苗と3000本の植林を行った。新たに活動地周辺のブンタル村が参画し、植林活動に参加した。当年度はボランティア植林を2回実施することができた。本協会会報誌にて、3年間の事業報告を掲載し、広く一般に事業成果について

広報を行った。

事業をよく知る関係者の声

- ・サラワク州のマングローブ林は1990年から2017年の間に約8000ha減少している。マングローブ植林は、二酸化炭素の吸収と固定、マングローブ生態系の修復に寄与する活動であるとともに、若い世代と地域住民参加による協働は、地球環境保全理解の深化に大きな足跡を残している。(日本の専門家)

参加者の声

- ・大学で森林科学を学んでいるが、実際にフィールドに出て、手で触り、匂いを感じると、自然がより身近になり、学習意欲も高まる。(20代マレーシア大学生)
- ・マングローブ林の劣化が進み、引き潮時に遠くまで行かないと貝類が採れなくなっている。これからも協力して活動を継続していきたい。(50代住民)



地域住民が育苗



現地大学生による植樹



地域住民による植樹



サラワク州森林局で活動成果報告

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：1.5ha
植付本数：3000本
育苗：4000本

参加者数

日本：3人
マレーシア：230人
計：233人

樹種

オオバヒルギ、フタバナヒルギ

インド国オディッシャ州ゴパルプール地区の住民による「持続可能な生活林」づくり

インド・オディッシャ州ガンジャム地域



事業概要

インド東部オディッシャ州はサイクロン常襲地域で、とくに2013年と翌年には大型サイクロンによる暴風と洪水で、防風・防砂の植栽が壊滅的打撃を受け、数十万人が家屋を失った。被災者には復興支援集合住宅が建設されたが、周辺の緑化などには手が付けられていなかった。

夏には気温が摂氏40度を超える地域で、むきだしのコンクリート箱型住宅での生活は苦痛で非健康的であり、周辺の緑化を求める住民の声が高まっていた。それに応え、住民自ら環境再生を実現するための教育と技術研修を行い「持続可能な生活林」活動を推進した。

事業成果

2種類の緑化を実施した。①復興支援住宅周辺でのまとまった規模のコミュニティ植林(15ヵ所)。女性による自助グループ(SHG)を形成し、村落単位の会合を実施した。会合では、「持続可能な生活林」の概念と植林の目的、育苗、植

林、植林後の世話の方法などについて専門家を派遣し研修を行った。植林地の整備作業を行い、雨季前の8月に植林。
②それぞれの住居隣接地のバックヤード(裏庭)緑化。

事業をよく知る関係者の声

- ・SHGの取り組みはすばらしい。今後も現地の状況に合わせた発展が見込まれ、地域社会の発展に直結する取り組みと考えられる。水が数日に1回しか確保できない。水問題は改善の余地があると思われる。その一つが雨水利用で、家屋の屋根から雨水をとり、適切に貯留することで利用可能にできる。(九州大学工学研究院環境社会部門)

参加者の声

- ・植林によってコミュニティに緑が増えることを期待している。(SHGメンバー)
- ・栄養価の高い野菜や果実を収穫することができてうれしい。植林活動を継続したい。(裏庭緑化をしたSHGメンバー)



雨期前の8月に植樹



植樹後



住宅隣接地に植樹



緑化された住宅

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：23.04ha
植付本数：4万441本

参加者数

インド：414人
計：414人

豊寧県緑化環境保全事業

中国・河北省豊寧県



事業概要

中国内陸部での砂漠化の影響に伴い、近年では黄砂の被害や頻度が急速に広がりつつある。また中国では大気汚染問題も深刻化しており、北京でもPM2.5の影響が大きくなってきている。黄砂やPM2.5などは、日本にも影響を及ぼす状況でもある。こうした被害を少しでも軽減させるため、河北省豊寧県にて植林活動を実施した。

事業成果

今年度は、令和2年5月に植林ボランティアのイベントを企画し、中国側と調整してきたが、新型コロナウイルスの影響もあり、植林ボランティアは中止した。しかし、現

地の林業局と連携し、植林地周辺の住民に協力してもらいながら予定していた植林活動を実施することができた。イベントは中止となったがより緊密な連携を図ることができた。

事業をよく知る関係者の声

- ・現地林業局からは「日本からも参加者がいれば良かったが、今回は残念だった。来年はいっしょに植林活動をしましょう」との声があった。

参加者の声

- ・日本からの参加者がいなくて寂しかったが、がんばって苗木を植えた。来年はいっしょに植えたい。(地元住民)



植樹地



障子松を植樹



水を用意



植樹は現地の人々で行った

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0.5ha
植付本数：1360本

参加者数

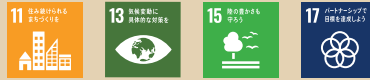
中国：37人
計：37人

樹種

障子松

東アマゾン島嶼部での河岸林復元と持続可能な集落開発

ブラジル・パラ州



事業概要

違法除伐により生態系の劣化が起こっているアマゾン河岸林の荒廃した河岸砂地で、アグロフォレストリーの手法による植樹を実施、河岸砂地の植生回復を図る。主な活動は、①土壌流出が起こっている集落で、植生回復の重要性を説明、合意形成を図る。②植樹活動を行うため、住民が在来種の種を採取、苗木づくりや土づくりを学ぶための講習会を開催、地拵えなどを実施。③周辺集落の子どもも参加した植樹祭を開催。

事業成果

従来は苗木を市販で調達することが多かったが、今回は一部種子は購入し、また在来種の種は住民が採種し、育苗から指導、また土づくりも専門家の指導で実践した。有機

堆肥を混ぜて土づくりから実践することで、住民みずから荒廃地を回復させる技術をまだ初歩レベルではあるが習得できた。

事業をよく知る関係者の声

- ・本プロジェクトを指導して、特に女性たちが大変に活動的で、組織的に働くことに驚いた。(外部専門家)

参加者の声

- ・集落住民の生活向上に役立つアドバイスを得ることができた。アサイヤシの新品種の種子と苗木づくりは住民の多くが参加した。子どもたちへのゴミの処理、森の役割なども教えてもらい嬉しく思っている。今後も植樹地の管理をしていきたい。(地域住民)



土壌流出した河岸



土づくり講習会



苗木づくり講習会



植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0.2ha
 植付本数：1028本
 地拵え：0.2ha
 講習会：2日

参加者数

ブラジル：200人
 計：200人

樹種

アサイヤシほか37種

ジャカルタ湾岸 マングローブ林再生プロジェクト

インドネシア・西ジャワ州ブカシ県



事業概要

ジャカルタ西部湾岸地域におけるマングローブ林の回復事業。放棄されたエビ養殖池跡地 4 ha の森林回復を目的とし、オオバヒルギ植林を実施した。

植林事業により将来的に自然生態系の回復が見込まれ、特に天然のエビ・カニなどの漁業資源の回復が期待できることから、森林回復活動と地域住民の生計向上効果の両立が見込まれる。また、当該地域は政府が定める森林保全区であることから、本事業の成果が政府公認の森林回復活動として承認され、インドネシアの森林保全政策におけるモデル事業として位置づけられた。

事業成果

事業実施地における優先種であるオオバヒルギの植林。エビ養殖池跡地において、2 × 2 m 間隔の植付を行い、計 1 万本の植林を実施できた。



植樹のためタケの支柱設置



オオバヒルギの植樹



住民だけでなく林業公社職員もボランティア参加



漁業資源の回復が期待される

当該地の森林管理を政府より委託されている林業公社の技官による技術指導を通じて、政府が定める基準に則った植林を実施。植付に際しては、植付区画と畦との間に 5 m ほどの水路部を設けるシルポフィッシャー形式とし、マンエビ・カニの収穫など漁業活動における地域住民の生計向上の一助となることが期待される。

事業をよく知る関係者の声

- ・予定通りの植林が実施できた。地域住民の参加によって植林が実現できた。地域の森林回復活動にとってモデルとなりえる。こうした点から高く評価できる。(現地を管轄する林業公社職員)

参加者の声

- ・マングローブ林が回復することに伴ってエビ・カニなどの漁業資源が増加することに大きな期待を抱いている。今後も森林回復に努めたい。(地域住民)

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：4 ha
植付本数：1 万本

参加者数

インドネシア：100人
計：100人

樹種

オオバヒルギ

エクアドル・ガラパゴス諸島における住民参加型植林事業

エクアドル・ガラパゴス県



事業概要

ガラパゴス諸島で人間の居住区や観光地において本来の植生を回復させると共に外来種の侵入機会を減少させ、当地のユニークな生態系を保全し独自の生物多様性を守る。そして、島民や地域の団体が活動に参加することで、生態系や保全へ関心を寄せ、自発的に保全を推進するようになる下地をつくる。主な活動は、①植林活動を推進するための育苗施設を整備、②居住地域の学校や観光スポットなどにおいて植林、③住民や協働機関へのワークショップ。

事業成果

学校や農場の他、観光地など6カ所に苗を植えた。学校敷地内と、公共の公園には、モデルケースとなる緑地をつくった。また島の人たちにこの活動の趣旨や目的、将来の展望などを話す機会を設けた。観光客が多く訪れる場所でも2カ所で植林を行い、訪問者が関心を持ってくれるよう植物の説明を書いたプレートを設置した。島内の農水省、環

境省、大学、農業センター、NGO等の関係者にこの活動を発表する場を設けたことから、協働として関心を持ってもらえ、次のステップに繋がった。

事業をよく知る関係者の声

- ・節水器具を活用するようになって定着率は上がり、特に難しいサボテンでもすばらしい生育だ。コロナの影響で活動が思うようにできなくても、モデル緑地やガイドブックなどを制作して、住民への働きかけにも力を入れていた。(元植物研究者)

参加者の声

- ・色々な障壁があったものの、この事業が段階をきちんと踏んで遂行されていくところに大きな関心と感動を覚えた。モニタリングをたくさん行い、データ分析をしているところもすばらしい。保全における科学の役割に大きな魅力を感じた。(学生)



育苗施設を整備



学校や農場などに植樹



苗の定着率が上がった



ワークショップ

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0,72ha
植付本数：517本

参加者数

日本：27人
エクアドル：60人
計：87人

樹種

マタサルノ、ブルセラ、ウチワサボテン、ウニャデガトほか

モンゴル国ゴビアルタイ県草原緑化・砂漠化防止事業

モンゴル・ゴビアルタイ県ビゲル村



事業概要

急速に砂漠化が進行しているモンゴルにおいて飼料不足が深刻化している。飼料利用が可能となる在来種カラガナの大規模造林事業を実施すべく、苗木の自給体制を構築した。主な活動は以下のとおり。①簡易的な温室を設置し、高コストながら確実なポット苗の生産。②費用対効果の高い露地によるポット苗生産。③対象村の周辺で土壌条件の異なる3箇所を封柵し、最も低コストの播種による造林の可能性を把握すべく、発芽実験を実施。

事業成果

飼料木としても利用可能な荒漠地緑化を目的としたカラガナの大規模造林を実施するための播種実験及び苗の生産実験である。播種については、結果が芳しくなかったが、苗は、露地、ビニールマルチ、温室の3種類で生産実験を行った結果、発芽率は露地64%、ビニールマルチ9%、温室66%であった。コストや手間を考えれば露地が最も優れて

いたと評価できる。

上記の結果から、播種とポット苗生産の成果の差は、発芽温度ではなく、礫や堅い土壌条件に起因すると推察される。そのため、今後当該地において大規模造林を実施する際には、露地による苗の生産と、対象地を耕起しての植栽が有効だと判明した。

事業をよく知る関係者の声

- ・私の故郷で緑化事業を行っていただき大変嬉しい。地元の方は、植えることには不慣れだから、こうした経験をして自分達で緑を増やすようになる素地を育ててほしい。(モンゴルNPO代表)

参加者の声

- ・すぐに苗木を植えるのではなく、種を蒔いたり苗をつくることから始めるのは意外だったが、将来自分達でできるようにするためと聞いて納得した。住民は、日本からの支援に大変喜んでる。(村役場職員)



露地でポット苗づくり



育った苗



ビニールマルチを使った苗木づくり



ゲルのなかでの苗木づくり

実績とりまとめ

作業内容

播種面積：3ha
ポット苗作成：1万5000個

参加者数

日本：6人
モンゴル：57人
計：63人

樹種

カラガナ

ミャンマーの木工品生産地における住民の資源管理意識の向上のための森づくり事業

ミャンマー・バゴー地方バゴータウンシップ



事業概要

伝統的に木工品生産が行われてきたミャンマー・バゴー地方において、地域住民の環境保全への意識や、木工品生産者の資源管理意識の向上をめざして、地域の公共の場である学校に、環境教育に利用する学校林を造成するための植林を行う。主な活動は以下のとおり。①現地行政へ植林計画について相談、②レーインスー小中学校の教師と植林計画を協議、③レーインスー小中学校構内の植林予定地の整備と植林後の苗木管理のための給水整備および苗木調達、④地域住民、木工品生産者、教師による植林、⑤緑の募金事業看板および樹木名プレートの掲示、⑥日本での広報と募金活動。

事業成果

一連の活動を通じて、地域住民や木工品生産者らが植林の意義に触れ、環境保全や資源管理について意識する機会をつくることができた。日本では、バゴー地方で生産され

る木工品の販売する場所等に募金箱を設置して募金活動を行った。

事業をよく知る関係者の声

- ・植林した木々から、生徒たちは多くのことを学ぶことができる。私たち教師も、この木々を教育に活かせるよう頑張りたい。これまでに経験のない、新しい取り組みを学ぶ良い機会と捉えている。(レーインスー小中学校長)

参加者の声

- ・自分が子どもの頃は学校林はなかった。これで、子どもたちが学べる機会ができると思うと嬉しい。(植林参加者)
- ・今日の活動は自分も楽しみながら参加できた(植林参加者)
- ・政府も植林を推奨している。活動に参加できてよかった。(植林参加者)



小中学校での打ち合わせ



給水用資材設置



マンゴー、パパイヤほかを植樹



住民参加で植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0.08ha

植付本数：100本

参加者数

ミャンマー：20人

計：20人

樹種

マンゴー、パパイヤ、グアバ、ザボン、ジャックフルーツ

モンゴル国ゴビ地域苗場造成と森林公園造成支援

モンゴル・ゴビツンベル県チョイル市



事業概要

6年前に県知事が「緑のゴビ」を政策に掲げ、30haのスポーツ森林公園造成に着手した。1昨年、国の政権が変わり、知事は交代したが公園造成政策は継続し、昨年度は当センターは12haの植林を行っている。今年度からモンゴル国立教育大学の協力の下で苗場造成に取りかかっている。また、在モンゴル日本大使館の協力で当地に「青少年植林訓練センター」設立をめざしている。このセンターはゴビ地域の「モンゴル人自らの手によって緑をよみがえさせる活動」の中心的役割を担う場所である。

事業成果

植林業者から入手した苗木に立ち枯れが目立つため、県独自のゴビ特有の環境に育つ苗の育成場を造成した。規模は井戸と貯水槽を設置し、12haの苗場のうち5haを三層の

樹木で風砂の保護柵をつくり苗木を直植えた。また、植林講習会も年4回開催した。

事業をよく知る関係者の声

- ・当法人は環境問題で最も困難なゴビの砂漠化防止のための研究と植林に立ち向かっている。ゴビ地域の環境は苛酷である。しかし、当法人が20年間に培ったモンゴル人との信頼関係は絶大である。事業達成はその地の人と人の輪によって成しとげられる。(大学教授)

参加者の声

- ・当講習会では実習もできて、効果があって、良かった。(50代女性)
- ・生徒たちに教えたり、見せたり、実験したりするための多くの知識を得た。「木を植える」という目標に適した良い講習会だった。(中学校教員)



中学生のための植林講習会



植林講習会



苗畑の造成



住民のための植林講習会実習

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：14ha
植付本数：5900本
森林公園造成：3ha
苗畑造成：12ha

参加者数

モンゴル：275人
計：275人

樹種

アカシア、ポプラ、ニレ、カラマツほか

ベトナムにおけるマングローブ林再生事業

ベトナム・ホーチミン市



事業概要

破壊されたマングローブ林を本来の多様性に富んだ森に回復させる。主な活動内容は、①不成績造林地での再植林を実施した土地でのニッパヤシの下刈、②放棄塩田での植林、③両植林地における成長モニタリング調査など。

事業成果

再造林地では昨年に引き続き約2haのニッパヤシの下刈作業を行った。放棄塩田では、約1.4haの範囲に活着率の高い3種の苗を植林した。

事業をよく知る関係者の声

- ・地盤高や冠水頻度などの立地環境を把握した上で、その

場に適した樹種を選定し、植林を成功に結びつけた実績は高く評価できる。放棄塩田などの裸地における植林では、密植することで定着率を上げられる可能性がある。(マングローブ研究者)

参加者の声

- ・土地に適した樹種を選んで植え、定期的にそして継続的に下刈しなければならず、根気のいる取り組みと感じた。(20代男性)
- ・ベトナム人と日本の学生が共に協力しながら作業を行い、励まし合いながら作業ができた。この作業によりマングローブの森が再生すると思うと達成感があった。(20代女性)



苗木を被陰するニッパヤシを整理



苗の運搬



ヒルギダマシ、ウラジロヒルギダマシほかを植樹



ベトナム人と日本の学生が協力して植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：1.4ha
植付本数：3500本
下刈面積：2ha
成長モニタリング調査

参加者数

日本：111人
ベトナム：66人
計：177人

樹種

ヒルギダマシ、ウラジロヒルギダマシ、マヤブシキ

上・下流部住民の交流による流域の森林再生(第3年次)

フィリピン・西ネグロス州シライ市



事業概要

目的は、かつて日本への輸出のためやエビ養殖池の造成のために伐採された経緯のある西ネグロス州シライ市のマリスボッグ川流域の自然の回復と住民の環境意識の向上である。主な活動は以下のとおり、①マングローブ植林。②上流部の森林再生。マングローブと果樹及び原生種の苗木を植林した。③植林地までの林道の整備。手入れを行いやすくするため、竹の歩道橋を整備した。④マングローブ祭りの開催。流域の住民同士の交流を促進し、流域の森林保全活動の啓発のため。

事業成果

今年度は、上流部に1970本、下流部に7145本を植林した。マングローブ祭りは、地元高校の参加の許可が下りなかったため、参加者は300人に減少したが、良い交流ができた。

事業をよく知る関係者の声

- ・本事業地において、2012年度より流域の森林再生活動に取り組んでいる。緑の募金の支援で、さらに3年間活動を継続できた。流域の自然環境の回復はもとより、住民の意識の向上が見られ、大きな成果を出している。近隣の他の流域に同様の活動を拡大されることが望まれる。(大学名誉教授)

参加者の声

- ・果樹の植林もマングローブの植林も両方体験できて、それぞれは全く違う環境だが、それらが流域でつながっているということが学べた。貴重な経験ができた。(大学生)



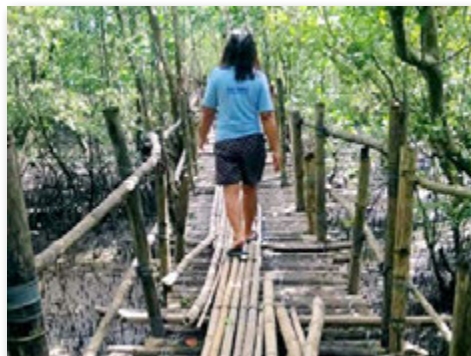
マングローブ植樹



住民団体と日本からのボランティアが参加



上流部には果樹や原生種の樹木を植樹



修理中の橋

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：1.2ha
植付本数：9115本

参加者数

日本：218人
フィリピン：780人
計：998人

樹種

マングローブ、果樹ほか

東ティモールの子どもたちと水源の森を再生する事業

東ティモール・エルメラ県、ディリ県



事業概要

東ティモールは、2012年に独立した世界の最貧国のひとつである。子どもたちの日課は、登校前に共同水場に水を汲みにいくこと。問題は、この大切な水場が乾季になると枯れるようになったこと。原因は、過度な焼畑や家畜の放牧などにより、水源涵養林が劣化したことにある。この水源涵養林の再生を、子どもたちを植林活動に巻き込みながら達成したいと考えた。植林活動と環境教育を結び付けていくのが本事業の目的である。小学生には「学校菜園」で、植林用の苗を育苗することで、緑の大切さを教えた。そのうえで二つの高校生が中心となって学校周辺と「浸透堰」の集水域に植林を行った。

事業成果

「学校菜園」は、県内から20校、他県から10校の小学校から生徒413人、先生は64人が参加し、一週間にわたって緑化、水、農業の大切さを学び、学校菜園づくりの実習も行った。高校生による植林は2ヵ所で行った。1ヵ所はコーヒー栽培地域で、乾季にコーヒーを洗うのに水が大量に必

要である。窒素固定を行う根粒菌と共生しコーヒーの庇陰樹となるモクマオウを植えた。もう1ヵ所は島で海岸部の集落で、ここは井戸に飲用水を頼っているが、塩水化している。ここでは学校菜園で育苗したマンゴーなどの果樹を植えた。

事業をよく知る関係者の声

- ・浸透堰の造成に、小学生・高校生を積極的に参加させるべきだった。浸透堰の造成、植林を通じて地域で水と緑を守る運動を一体化できる可能性がある。(現地カウンターパート職員)
- ・ほかの地域への展開のために、プロモーションビデオを作成しておきたかった。(現地カウンターパート職員)

参加者の声

- ・コーヒーも植えたことのない生徒が、喜んで木を植えていた。(高校校長)
- ・コーヒー栽培には豊かな水が必要であり、庇陰樹を植えるなど山を緑にしていくことの大切さを知る良い機会になった。(地域住民)



学校菜園での育苗



浸透堰



植樹の説明



高校生が楽しく植樹

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：3ha
植付本数：9000本
下刈面積：3ha
環境教育：2校

参加者数

東ティモール：1461人
計：1461人

樹種

マンゴー、ランブタン、マンゴスチン、モクマオウ、デイゴ

ネパール シンドウパルチョーク郡地震被災地の学校の緑化と地域の憩いの場及び避難場所として活用するための緑の公園づくり

ネパール・シンドウパルチョーク郡



事業概要

2015年の地震被害により失った学校内の緑の復活による環境づくりと共に、地域の緑を増やし同時に災害時の避難場所としても機能する緑の公園づくりを行うことで、豊かな地域環境を取り戻す。公園づくりのための整地及び1500本の植林を地域の森林組合が主となり実施。公園に池を掘削しその周辺の歩道づくり、その周辺及び公園として整備したエリアに植林していく。2回の植林キャンペーンを地域の人の参加を促して実施、5月にも実施予定であったが新型コロナの関係で中止となった。また苗は2000本を育てている。また村内の学校3校にて生徒参加の植樹祭を1回開催した。

事業成果

地域の人たちの注目度、関心度が向上し、足を運ぶ人が

増えてきた。特に将来的なことを考え、今年度は公園内には果樹を植樹し、村の特産につなげることをめざした植林を行った、学校では、生徒たちの積極的な関わりが見えてきた。

事業をよく知る関係者の声

- ・この活動が契機となり、村全体の意識が変わりはじめ、特に子どもたちがこの村や学校に対して愛着をもってくれるようになったことは大きな変化と嬉しく感じている。このまましっかりと根付いてほしい。(地区長)

参加者の声

- ・自分たちで植えるととても愛着を感じる。これまで、自分たちで学校の環境を良くすることは考えていなかったが、自分たちにもその役割がある事を知り、学校に対する意識が変わった。(学校での植林参加生徒)



学生たちの植林



地域の公園に植林



苗木づくり



植林地の歩道、作業道づくり

実績とりまとめ表

作業内容

植付面積：2.7ha
 植付本数：1875本
 下刈面積：5.0ha
 育苗：2000本
 公園整地：6ha

参加者数

ネパール：210人

樹種

マンゴー、ライチ、レモン、ナシほか

マダガスカルでの土砂流失防止の植林事業

マダガスカル・アラトラ省アンボヒダヴァ村



事業概要

マダガスカル共和国のアラトラ省アンボヒダヴァ村で、森林を再生しながら土砂災害を防止するために、植栽の専門家の指導を受けながら、住民とともに樹木を植栽する。参加者は、小学校から高校生まで延べおよそ3000人以上と大人20数人。植栽面積はおよそ7ha。

事業成果

住民は、植樹を村の恒例行事としてとらえていることがうかがえた。2月の植栽日には、村の小中学校を訪問していた若いアメリカ人ボランティアの数人も植栽活動に参加した。

事業をよく知る関係者の声

帰国後、会のメンバーに報告すると、彼らは広大な地帯での活動に少々ためらいがあった。長い時間と費用が必要だからだ。今後は、村での植栽が持続可能な技術的、組織的枠組みの構築が必要ではないかということだった。毎年一定の参加者数が見込めていることから、住民は自然を守ることの重要性を共有していると思われる。

参加者の声

村の子どもたちに聞くと、ほとんどすべての回答が、友達との作業が楽しい、毎年木を植えてほしい、とのことだった。



熱心に説明を聞く子どもたち



ユーカリ、アカシアほかを植樹



子どもたちの植樹後に専門家の確認作業



植樹参加者

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：7ha
植付本数：1万7500本

参加者数

日本ほか：7人
マダガスカル：3000人
計：3007人

樹種

ユーカリ、カエデ、アカシア、オレンジ

タイ北部山岳地域 ナムカー村の森林再生と農村開発

タイ・パヤオ県ポン郡ナムカー村



事業概要

40年前頃、難民としてこの地に定住した人々が安定した農業収入を得るために「GMO トウモロコシ畑」を「果樹林」に転換する。持続可能な森林農業と共に荒廃した大地を緑豊かな農地にすることにより森林をよみがえらせ、自立と持続可能で安定した豊かな生活の向上をめざす。環境保全型森林農業と循環型社会形成のモデルとして地域に波及することを目的とする。今年度転換した果樹は、マンゴー・オレンジ・アボカド・ドリアンなど。生育調査に併せて病虫害や土質などの障害調査も行った。

事業成果

ワークショップを行ったことにより植栽への理解と取り組みの大切さと誇りが感じられた。自然相手の農業に対する危機感もあり、今後も森林の役目と樹木の大切さが理解でき、トウモロコシから早く転換したいとの意見も多く聞

くことができた。

事業をよく知る関係者の声

- ・トウモロコシ栽培のため森林を伐採し開墾した。3～4年経過頃から農薬による健康障害や不作が始まり、豪雨災害が発生し耕作不能となった。農地の復旧に合わせ樹木の栽培が始まり、政府の奨励するゴム栽培も始まったが先行きは見通せない。トウモロコシ栽培から地産地消の果樹のプロジェクトへの転換が始まることとなり村は活気づいている。(村長)

参加者の声

- ・お父さんお母さんがとても喜んでマンゴーを植えました、私のマンゴーも植えました。私も水をあげて世話をしています。(小学3年女子)
- ・このプロジェクトが来るのを3年間待っていた。(村の世話人男性)



苗木の配布



植栽講習会



病虫害調査



SDGsセミナー

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：30.1ha
植付本数：6741本

参加者数

タイ：470人
計：470人

樹種

マンゴー、ラムヤイ、オレンジ、アボカド、ドリアン

モザンビーク共和国カーボデルガド州モリンガプロジェクト

モザンビーク・カーボデルガド州ペンバ市



事業概要

貧困率の高いペンバ市のスラム地区において、作物生産性の低さと高い栄養失調率の改善を含め、貧困地区の緑化を行う。主な活動は以下のとおり。①モリンガ400本とレモン200本以上を各家庭の庭に移植する。②植物の移植講習を現地協同組合の農業専門員により4回実施する。当会のスラムの学び舎・寺子屋の子どもたちの環境教育活動の一環として移植を実施。

事業成果

前年度よりも多くの子どもたちが育成・移植活動を手伝った。今年度は年末年始に巨大暴風雨が現地を襲い、再び、移植した苗が流され、当会で自主的に、追加の播種活動を実施したが、播種活動においても幼児から年長者までの子どもたちが手伝い、実践的な環境教育としての役割を果たせた。

事業をよく知る関係者の声

- ・木が伐採されるのはあつという間だが生育するには時間がかかるので、自然災害にあっても、地道に活動を続けていくことが大切だ。(講師)
- ・自然や環境に興味を示す子どもが増えているのは良いことだ。(農業グループ)

参加者の声

- ・モリンガは週に1度は食べる植物だし健康に良いので、これからも植えていきたい。(移植した家庭の主婦)
- ・カシューナッツやバナナなどの植物も挑戦できると良い。(青年)
- ・土をどれくらい掘れば良いのか、もっとコツをつかみたい。(子ども)



モリンガ苗の育成



モリンガの移植



レモンの移植



播種

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：0.06ha

植付本数：648本

参加者数

モザンビーク：203人

計：203人

樹種

モリンガ、レモン、グアバ

ミャンマー・インレー地域における水環境保全事業

ミャンマー・シャン州ニャウンシュエタウンシップ



事業概要

目的は、周辺の山や川からインレー湖への土砂流出を防ぐため。インレー湖の水質は日本の湖の最も汚れたレベルにあり、このまま土壌流入が続くと生態系の変化や水質汚染の急速化を引き起こすことが懸念されている。特に雨季に土砂流入量が増えている。活動内容は、①村民と協力しての7000本の植樹、②田んぼに土砂を沈殿させるための雨季作の実施、③環境研修。

事業成果

カロー川周辺に植林した。川周辺12村の村民と植林委員会が協力して実施し植林を行った。湖への直接の土砂流入防止のため、川水を田んぼに引き入れ、雨季の水稲栽培を実施するとともに田んぼで土砂を沈殿させた。田んぼでの水稲栽培のため、農業研修を3回実施、環境研修を4回実施した。

事業をよく知る関係者の声

- ・雨季作と植林の事業を高く評価したい。ヌワダマ村をモデルとして、他村にも広げるために農業灌漑省として貸付金制度をつくりたい。(農業灌漑省)
- ・ヌワダマ村が循環型農業に力を入れてうまくいっているので堆肥を作ってもらい、当社で販売したい。(オーガニック系肥料販売会社)

参加者の声

- ・木を植えるのが好きになった。今までは、木を植えたら自分の役に立つということを意識したことがなかったが、今は毎年木を植えたら、それだけ資産が増えることに気付いた。(植林参加者)
- ・昔は雨季でも川の水が濁ることはなかったが、今はすごく濁ってしまう。木を植えることで土の流入を少なくすることができるかと理解できた。(ワークショップ参加者)



環境保全のワークショップ



苗木の運搬



アボガド、ユーカリほかを植樹



川水を田に引き入れ、雨季の水稲栽培

実績とりまとめ

作業内容

植付面積：4.8ha
植付本数：7000本

樹種

アボガド、セイントロンマンゴー、カシュー、マンゴー、ユーカリ、チークほか

フィリピン・先住民の持続可能な森林経営に向けた苗木生産

フィリピン・東ミンドロ県ブララカオ町



事業概要

貧困状態にあるミンドロ島の先住民マンギャン族の持続可能な森林経営を可能にする。主な活動は以下のとおり、①ミンドロ島在来種カンラン科樹木の山引苗の採集。②小さな苗畑を各自設置し、採集した山引苗や果樹等の苗木を育成。③植栽予定地の準備及び下刈作業。④苗木育成の研修と森林資源を活用した石鹼製造研修。

事業成果

在来種カンラン科の木の有用性についてマンギャン族の理解が深まった。山引苗を採集し育成するという初めての取り組みを試行錯誤しながら行っている。山引苗の探索で行動範囲が広がり、森林再生に関心のある事業地域以外のマンギャン族や地元民との繋がりも広がった。

事業をよく知る関係者の声

・度重なる台風被災や新型コロナ禍の対応に追われ、町は



山引き苗



苗木育成



苗木育成研修



下刈

財政的にも人員的にも疲労している。遠隔地に住むマンギャン族にコンタクトするのは大変困難な状況にある。日本から支援いただき感謝している。森林産物が町の特産物になれば、生活は少し楽になる。とても意義ある活動だ。私たちもできるだけ協力していきたい。(ブララカオ町役場農業担当者)

参加者の声

・子どもの頃は、サヘンの木がたくさん生えていて、樹脂は灯りに使った。電気や灯油が買えるようになってからは不要になり、よく燃えるので薪用に伐採してしまった。サヘンの木は台風に強く、樹脂が高値で売れると事業説明を聞いた。伐ってしまい大変に残念な事をした。20年位かかると思うが、自分の孫たちのために、サヘンを植えていきたい。(サンロケ村住民)

実績とりまとめ

作業内容

下刈面積：15.3ha
山引苗採集・育成：4049本
播種：2000個
苗木育成研修：23回
石鹼製造研修：14回

参加者数

日本：2人
フィリピン：38人
計：40人

樹種

グヤバノ・マロンガイ・イラン
イランノキ